

調 査

下田市および松崎町観光ヒアリング調査報告⁽¹⁾

野 方 宏

1. はじめに

本ヒアリング調査報告は、静岡大学人文学部経済学科の教員を中心とした観光研究プロジェクト・チームが実施した第5回目の報告である。これまでの4回に亘るヒアリング調査報告については本号に掲載された石橋・野方「伊東市観光ヒアリング調査報告」を参照されたい。

ヒアリング調査先は静岡県下田市および松崎町であり、2005年12月19日および20日に実施した。今回の調査は熱海、伊東に続く伊豆半島における観光の現状の把握や各地域での観光への独自の取り組み、行政による支援活動を対象としたものであったが、以下で触れられるように、熱海・伊東地域とは異なる観光に対する地元の期待が感じられた。それは、熱海・伊東地域のヒアリング調査では、地域の基幹的な産業としての観光という観点からその振興を積極的に図るという姿勢が強く見られたが、下田・松崎地域ではそうした視点だけではなく、地域の定住人口ないし半定住人口の増加やそのための雇用の創出などといったことが観光に関連した重要な課題として捉えられていた、ということである。

以下、こうした点にも留意しながら下田市および松崎町の観光ヒアリング調査をまとめておきたい。

2. 下田市役所観光商工課におけるヒアリング

日 時 2005年12月19日

対応者 下田市役所観光商工課課長補佐山田吉利氏および同市観光アドバイザー村上政司氏

⁽¹⁾ ヒアリング調査に協力していただいた、下田市役所観光商工課課長補佐山田吉利氏、同市観光アドバイザー村上政司氏、下田市観光協会事務局長清野文隆氏、松崎町役場観光企画課係長馬場順三氏、松崎町観光協会主任石川静子氏にお礼申し上げます。なお、下田市役所および下田観光協会のヒアリング調査は、石橋太郎、鐵和弘、野方宏の3名が、また松崎町役場および松崎町観光協会のヒアリング調査は、山下隆之、鐵和弘、野方宏の3名が行なった。

(1) 下田市の最近の観光動向と外国人観光客

末尾に掲載した資料1および資料2にみられるように、下田市の観光交流客数および宿泊客数は共に平成6年度をピークに減少に転じ現在（平成16年度）に至っている。ピークの平成6年度と比較すると、平成16年度は観光交流客数で43%減の約332万人、宿泊客数では47%減の約99万人とこの10年間で大きな減少を示した。この時期、同じ伊豆東海岸に位置する熱海や伊東などでも観光客の減少傾向はみられるが、それでも25%程度の減少（伊東市の場合）に留まっており、下田のこの数字は著しく大きく、下田地域が観光客減少から受けた経済的ダメージの大きさが想像される。観光客の大幅な減少の理由の一つとして、観光シーズンの中心となる夏場の海水浴客の減少傾向があげられ（下田市内には9つの海水浴場がある）⁽²⁾、夏場の誘客への積極的取り組みと夏場以外の閑散期の底上げを図る必要性が述べられた。誘客に関する取り組みなどについては⁽²⁾で触れることにする。

外国人観光客の統計は特にとっていないとのことであったが、下田市が旅館などの情報を基にした推計では、台湾からの観光客が年間4,000人程度あるとのことであった。これは、伊東市に宿泊した台湾からの観光客の一部が下田方面まで足を伸ばした結果ではないかと考えられる⁽³⁾。

外国人観光客については、立地条件や交通アクセス、旅館などの受け入れ態勢の相違がかなりあるため、伊豆地域ないし伊豆東海岸地域においても地域ごとでかなり「温度差」があるのではないかという点が指摘された。我々のこれまでのヒアリング調査を通じてみても、熱海や伊東では独自の外国人観光客向けの観光案内パンフレットが作成されていたし、各種施設や案内板には中国語・韓国語・英語などの外国語表記がみられたが、下田市をはじめそれ以外の地域ではこの種のは殆どみられなかった。絶対数としての外国人観光客の少なさという点からみると、こうした現状も無理はないが、観光客の積極的誘致や伊豆半島ないし伊豆東海岸といった広域観光といったことを考えると、遠からず外国人観光客にも焦点をあてた取り組みが必要になろう。

(2) 広域観光および独自の取り組み

現在、下田市域を超えた広域観光に関しては、静岡県を中心に伊豆半島の13市町村と交通機関・道路公社で構成する伊豆観光推進協議会と伊豆東海岸3市2町による伊豆東海岸国際観光モデル地区整備推進協議会にメンバーとして参加し活動を行なっている。伊東市と同じく観光客の8割が首都圏からであるため、首都圏への観光キャラバンなど従来型の観光PRを観光協会が中心となつて行なっていることが紹介された。

⁽²⁾ 下田市観光協会から頂いた資料によると、平成6年度の海水浴客は約119万人、平成16年度は約62万人であり、50万人以上の減少となっている。

⁽³⁾ この点については、本号掲載の「伊東市観光ヒアリング調査」の外国人観光客の項を参照されたい。

また、12月中旬から1月末までの「水仙祭り」（下田市内にある爪木崎に約300万本の野水仙が群生している）と時期的に繋がる河津町の河津桜との連携の可能性も紹介された⁽⁴⁾。

行政の側の取り組みについては、反省も含めて以下のようないくつかの興味深い話を聞くことができた。

下田はペリーやプチャーチンの来航など幕末の開港を巡る歴史上の舞台としてよく知られており、日露修好条約が締結された長楽寺をはじめ市内にはいくつかの開港に関連した建物や街並が残っている。昭和9年に始まる「黒船祭」は昨年（平成17年）で66回を数えた。こうした歴史的背景と寺や街並といった歴史遺産としての観光資源を活用しようという取り組みが数年前からスタートした。例えば、下田の町歩きを推進するため「しもだ まちあるきマップ」を作成し、ボランティア・ガイドの養成を通じた無料の「ボランティア・ガイド・ツアー」が2001年より実施されている⁽⁵⁾。また、黒船祭は毎年5月の中旬に行なわれるので、夏前の閑散期の観光の底上げを図るイベントとして積極的に位置づけ、PR活動を展開していきたいとのことであった。

下田市が現在力を入れて取り組んでいるものに、体験型観光の試みがある。例えば、「伊豆海洋自然塾」という組織を通じてボランティアの養成を図り⁽⁶⁾、「磯の自然観察」という観光体験プログラムを立ち上げ、それを下田の自然体験メニューの一つとして売り出そうとするものである。ヒアリング調査時点で、既に延べ4,500人ほどの修学旅行生がこのプログラムを体験しているとのことである。

また、観光客の実態調査の一環として初めて観光客200人ほどを対象にしたアンケート調査が我々のヒアリング調査直前に行なわれた（平成17年11月中旬～12月下旬）⁽⁷⁾。それによると、下田を選んだ動機で半数以上が温泉と回答し、年齢層としては60歳代が40%と圧倒的に多く（50歳代以上が3/4を占める）、回答者の80%が「下田は2回以上」というリピーターであった。半年後に調査地点と調査規模を広げた第2回目のアンケートを実施予定とのことである⁽⁸⁾。

(3) もう一つの観光に関連した取り組み

下田地区には43ほどの源泉があり、下田温泉会社が道路下に温泉の配管を敷き、旅館だけでなく個人住宅にも温泉が利用可能な状態にある。また、下田地区は首都圏から乗り換えなしに電車

⁽⁴⁾ 花をキーワードにした伊豆地域の広域観光の可能性については本号掲載の「伊東市観光ヒアリング調査」の広域観光の項を参照されたい。

⁽⁵⁾ ボランティア・ガイドは教育委員会が養成を担当しているが、運営費などからガイド・ツアーの有料化を考慮していること、また、外国人向けのガイド・ツアーも検討中とのことであった。

⁽⁶⁾ 伊豆海洋自然塾は現在、下田市役所観光商工課の下部組織であるが、将来はNPOに移行させたいとのことであった。

⁽⁷⁾ アンケート調査の結果については、毎日新聞2006年1月26日付けの記事を参考にした。

⁽⁸⁾ 調査時期や駅という調査場所が、アンケート結果に偏りをもたらしている可能性のあることがヒアリング調査時点で述べられていた。

1本でこれらという交通の利便性を持っている。そのため、従来から下田は温泉地としてばかりでなくリゾート地としてのイメージも持たれていたという。

2007年問題といわれるように、団塊の世代の行動が数年前から論議を呼んでいる。下田市は、上に述べた立地条件に恵まれたリゾート地として、単なる別荘地としてではなく半定住を促す政策、例えば東京と下田に1年を住み分けるといった長期滞在を促す政策などを念頭に以下のようなことが試みられている。例えば、下田という地域がどういう所であるかという情報発信、(半)定住希望者のミスマッチを避けるために相談センターや窓口を暫定的に設置するといった内容のものである。また(半)定住希望者と市内に相当数ある空き家とを繋げることができないか、といった空き家対策も市をあげて取り組まれた⁹⁾。

3. 下田市観光協会におけるヒアリング

日 時 2005年12月19日

対応者 下田市観光協会事務局長清野文隆氏

下田市役所でのヒアリング内容と重複する部分かなりみられるので、ここでは重複しない範囲で要点だけを箇条書きにまとめておこう。

- ・外国人観光客の誘致活動は市や観光協会だけでは限界があり、個別の旅館やホテルの行動が必要であるが、単独ではコストがかかり過ぎ現実には誘致活動は難しい。
- ・泊食分離について、年間を通して全面的に取り入れているところはないが、季節ごとに試みているところはある。また、湯治場的な施設の場合には泊食分離導入の可能性が高まるのではないか。
- ・数年前、料飲組合と提携してミール・クーポンを試みたが、利用者が極めて少なく、失敗に終わった。
- ・連泊などに対する宿泊料金の割引制度(多様な宿泊料金の設定)について単独で行なっているところはあるが、観光協会としてはまだ検討の対象にはなっていない。
- ・水仙祭り、黒船祭、あじさい祭り(6月)などのイベントは、期間中一定の誘客効果がみられる。
- ・体験旅行型プログラムとして今夏(2005年)シュノーケルや海ポタルの観察などを試みたが好評であった。

⁹⁾ 予算的措置がうまくいかず結果的に頓挫した平成15年度・16年度の「下田リノベーション政策」は、このような趣旨に基づくものであったという。

- ・ 1泊2食7,800円という低価格旅館チェーンが2005年10月に開業した。夏場は、民宿などに影響が出ると思われるが、他方集客力も期待でき、レストランや土産物屋にはプラスになるかもしれない。
- ・ 下田の歴史遺産についてどのように活用したらよいか分からない所があるが、体験旅行型プログラムと組み合わせた活用が考えられるのではないかと。

4. 松崎町役場観光企画課におけるヒアリング

日時 2005年12月20日

対応者 松崎町役場観光企画課係長馬場順三氏

松崎町の年間観光客数はここ数年で見ると、60万人程度、宿泊客数は20万人程度で推移している。宿泊施設は160軒ほどあるが、その9割は民宿が占めている。観光客の中心は7・8月の海水浴客が中心であるが(松崎地区には4か所の海水浴場がある)、伊豆の他地域同様、年々減少の傾向を示している。また、観光客は下田などと同様首都圏からの客が大部分を占めている。西伊豆という立地や交通アクセス、宿泊施設などの受け入れ態勢などの問題のため、外国人観光客は殆ど訪れていない。そのため、松崎町独自の観光PR活動は特に行っていないが、外国人向け観光パンフレットの作成は検討中とのことであった。

松崎町の観光客受け入れの中心となるのは、既にみたように民宿である。民宿は昭和45年頃より始まり、以後民宿を中心に松崎町の観光は発展して来た。しかし、一時200軒ほどあった民宿も高齢化(と後継者難)を主たる理由として減少を続け、現在は142軒にまで減少している(30%減)。また、観光資源として大きな可能性を持つ花の栽培に関しても、かつてこの地域はマーガレットなどを中心に花の出荷が盛んであったが、高齢化(と後継者難)のため現在では花の出荷は殆どされておらず、イベント時に花を植えているのが実状である⁽¹⁰⁾。このように、この地域の観光振興を考える場合、先にみた下田市と同様定住人口をいかに増加させるかという問題と密接に繋がっていることに注意しておく必要がある⁽¹¹⁾。

⁽¹⁰⁾ ハウスで花の栽培をしている農家は1軒だけとのことである。

⁽¹¹⁾ ヒアリング時に「国勢調査のたびに町の人口が400人ほど減少しています」という発言があった。そのため、「企業誘致などを試みたが、結局うまくいかなかった」とのことである。観光振興が若者を中心とした雇用の創出とその結果としての定住人口の増加に繋がって欲しいという期待が、ヒアリング時には感じられた。因みに、松崎町の人口は約8,600人である。

(1) 広域観光および独自の取り組み

伊豆全体を対象とした「伊豆観光推進協議会」に加えて、西伊豆・中伊豆の4市3町の行政と観光協会および3交通機関で構成する「中伊豆・西伊豆観光連盟」が平成17年4月に発足した。ここでは、広域観光ルートの一環としてウォーキングを中心とした提案を行なっているとのことであった。また、花を巡る伊豆の一体化や地域間の連携の可能性についても述べられた。

行政の取り組みのうち、ここでは花と町並みに関わるものを紹介し、グリーン・ツーリズムに関係したものは項を改めて述べることにする。

松崎町を流れる那賀川沿い約6kmには約1,500本のソメイヨシノの並木道があり、20年ほど前から春先の行政主体のイベントとして行なわれて来ている。最近になって「花の咲く町事業」の一環として、「田んぼを使った花畑と桜並木ウォーキング」という形の規模も期間も大型化された新しいイベントへの衣替えがなされた。農閑期の田んぼ約66,000m²を町が借り上げ、アフリカキンセンカなど7種類の花を植え、3月上旬から5月の連休まで大規模なお花畑を楽しんでもらおうという企画である。毎年イベント期間中は30,000人~40,000人の誘客効果があるとのことであった。

松崎町は、なまこ壁の家並みや江戸時代の左官入江長八に代表される漆喰彫刻、明治時代の商家である中瀬邸、明治13年に建築され小学校として使われ現在国の重要文化財である岩科学校、またこうした建物や景観の良さから昔から映画・ドラマのロケ地として利用されて来たことなど⁽¹²⁾、豊かな観光資源に恵まれた町である。昨年(平成17年)4月に「ふるさとガイド松崎」が立ち上がり、ボランティア・ガイドが無料で町の案内や歴史遺産の説明などを行なっている。また、行政の側の町並み保存への取り組みとして、「なまこ壁伝承事業」が進行している。これは、一定範囲に限定した地域のブロック塀になまこ壁を貼るという事業である。ただし、なまこ壁を貼るコストの高さや職人の減少という問題があり、なまこ壁の町並みといった町の景観を維持・保存する上での難しさが述べられた。

なお、桜となまこ壁を組み合わせたイベントとして、伊豆早春フラワーウォーキング推進協議会が主催する「伊豆松崎なまこ壁と桜のツーデーマーチ」が4月上旬の桜の季節に開催されていることを紹介しておく。

(2) グリーン・ツーリズムへの取り組み

松崎町石部地区では、古くから後背地に約10haの棚田を耕作していたが、高齢化などのため耕作放棄が進み棚田の持つ美しい景観が損なわれていた。平成12年より地域住民を中心に棚田の復

⁽¹²⁾最近では、人気ドラマ「世界の中心で、愛をさけぶ」のロケ地として使われたことから、若者のロケ地巡りのスポットとして人気があるとのことであった。

元作業（復田）が始まり、平成14年度からは都市住民との交流を目的に都市住民を対象にした棚田オーナー制度を開始した。毎年5月と10月の田植えと稲刈りの時期には、300人程のオーナーが石部地区の民宿に泊まり、農作業の体験をすると共に地域住民との交流が図られ、地域の活性化にも繋がっているとのことであった⁽¹³⁾。今後の目標として、「富士山が見える全国で随一の棚田の景観形成」を掲げ、棚田保全推進活動を着実に進めていくとのことである。

松崎町は、4年程前にこれまでであった観光情報連絡会議を改組してグリーンツーリズム推進協議会を発足させている。その1つの試みとして、民間ボランティアを中心に、陸と海を組み合わせた体験型観光がある。棚田などでの田植えや稲刈り、ワサビの栽培、夜光虫の観察、地引き網や定置網漁の体験などである。こうした体験型観光としては、松崎町岩地地区での若手を中心とした活動がある。修学旅行生を地区の民宿が受け入れ、カヌー、地引き網、櫓漕ぎなどを体験させるというもので、1シーズンで2,000人程度受け入れているとのことである。

5. 松崎町観光協会におけるヒアリング

日 時 2005年12月20日

対応者 松崎町観光協会主任石川静子氏

松崎町役場でのヒアリング内容と重複部分があるので、重複しなかったヒアリング項目についてのみ以下箇条書きにまとめておこう。

(1) 外国人観光客について

- ・外国人観光客は極めて少ないが、幕末の開港という歴史的背景からロシアと交流しているグループがあり（下田市に本部があるとのこと）、ロシア人のホームステイが学生中心に20人程度の規模で行われている。
- ・外国人観光客向けに観光パンフレットに英語を入れているが、当分、韓国語などの外国語を入れる予定はない。

(2) 泊食分離と連泊などについて

- ・泊食分離を実施している所はないが、客からの要望があれば、殆どの宿は対応している。
- ・連泊は受け入れ側としてあまり歓迎していない。民宿中心であり、長い時間滞在されると、家のことができないためである。
- ・新しい動きとして、若い人（2代目）が専業の民宿を行なうケースが出て来た。ダイビング、

⁽¹³⁾オーナーの中には農作業体験に参加する以外に、この地区で毎年行なわれている「石部大地引網まつり」に訪れる人も多くなっているとのことである。

海水浴、料理（自前の船を持ち漁に出たり、山菜採りなどを行なう）を観光の売り物にした
り露天風呂を作るなどの新しいことを始めている。

- ・ただし、一般的には働く場所も少ないためUターンが難しく、その結果空き家も増えている。
また、交通のアクセスが悪く医療機関も十分に整っていないので、定住も進めにくい。

(3) 独自の取り組み・ブランド化事業などについて

- ・観光協会は町並みや景観、歴史に重点を置いた観光PR活動を行なっている。ボランティア・ガイドもそうした一環として取り組んでいる。
- ・明治期に早場繭の生産が行なわれ、松崎相場といわれるものが全国的に知られた歴史がある。
- ・松崎ブランドについて、特に積極的な取り組みはしていないが、石部の棚田に関係したもの（「棚田黒米焼酎」など）を検討中である。
- ・岩地地区の海水浴場は5月上旬から9月一杯までと長期間開かれているので、これを何らかのブランドとして売り出せないか検討中である。
- ・桜葉の生産は全国の70～80%を占めており、今は桜葉の塩漬の生産程度であるが、何らかの活用を考えたい。ただし、十数年前香りの抽出を試みたが、失敗した。
- ・ロケ地候補が沢山あるので、これを積極的にアピールしていきたい。
- ・行政への要望として、なめこ壁の蔵などが取り壊されている状況にあるが、町が買い上げた
り条例などを制定して景観の維持や町並みの保存を図ってほしい。
- ・観光客へのアドバイス、イベント情報の発信、宿泊施設の紹介といった観光協会の活動を積
極化する上で、活動資金の不足が最大のネックになっている。

下田市観光交流の動向

資料1 観光交流客数の推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
昭和63年度													5,884,018
平成元年度													4,357,156
平成2年度													5,406,563
平成3年度													5,717,213
平成4年度													5,592,471
平成5年度													5,334,920
平成6年度													5,884,715
平成7年度	209,596	504,239	524,437	594,637	1,687,543	208,281	214,721	190,856	359,613	494,047	185,648	226,180	5,399,798
平成8年度	245,484	596,740	458,756	610,067	1,548,444	216,507	268,418	264,287	281,075	577,508	181,776	165,046	5,414,108
平成9年度	173,908	495,253	398,548	493,414	1,565,743	221,450	200,671	360,712	304,336	507,607	170,552	222,746	5,114,940
平成10年度	145,493	332,698	300,841	476,565	1,238,483	129,894	210,707	177,742	135,314	583,094	158,804	197,672	4,087,307
平成11年度	136,987	387,620	338,255	461,402	1,118,843	137,328	227,794	170,217	142,130	666,710	168,695	220,998	4,176,979
平成12年度	138,700	421,262	304,115	352,036	900,502	146,096	129,580	236,473	129,139	621,155	140,950	165,703	3,685,711
平成13年度	124,617	409,846	329,347	416,645	1,048,942	141,815	143,869	157,068	168,284	667,468	143,534	174,593	3,926,028
平成14年度	126,029	355,424	287,160	338,967	936,200	150,618	138,542	146,146	159,625	593,023	132,602	180,476	3,544,812
平成15年度	103,120	361,175	315,853	317,044	737,358	159,851	133,171	153,539	161,253	531,261	143,567	167,618	3,284,810
平成16年度	112,057	432,677	298,461	357,869	872,100	150,175	118,092	128,563	194,380	370,716	123,448	165,653	3,324,191

資料2 宿泊客数の推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
昭和63年度													1,511,334
平成元年度													1,248,232
平成2年度													1,415,872
平成3年度													1,780,041
平成4年度													1,675,745
平成5年度													1,805,740
平成6年度	107,831	140,891	90,634	192,078	465,642	108,706	115,955	115,418	105,069	135,324	123,055	166,550	1,867,153
平成7年度	98,676	131,874	86,764	172,889	453,256	97,781	62,050	88,931	86,484	65,642	67,822	77,693	1,489,862
平成8年度	114,464	134,116	104,290	179,805	489,516	100,714	68,255	129,839	86,484	68,268	79,352	62,154	1,617,257
平成9年度	96,150	103,270	84,475	172,812	518,611	121,034	67,674	128,935	114,578	71,346	78,940	81,893	1,639,718
平成10年度	64,447	62,140	51,344	109,318	249,994	58,791	58,476	78,155	61,860	79,390	87,749	96,035	1,057,699
平成11年度	58,817	67,520	53,712	105,841	276,451	58,446	57,519	68,726	56,314	74,604	88,314	83,822	1,050,086
平成12年度	63,551	67,755	48,767	96,110	215,482	55,528	51,307	68,284	62,147	74,528	77,029	78,825	959,313
平成13年度	51,705	60,952	49,653	100,794	243,991	55,772	53,812	69,660	71,767	77,956	86,195	86,155	1,008,412
平成14年度	54,342	60,891	45,879	99,987	235,939	55,102	58,224	72,237	74,063	67,299	83,037	82,056	989,056
平成15年度	45,935	57,799	59,607	96,237	214,458	63,176	48,087	76,780	82,278	52,373	90,277	85,178	972,185
平成16年度	51,972	75,691	57,487	101,662	212,248	66,246	52,707	68,535	65,727	67,083	75,230	91,363	985,951

*平成元年3月料理飲食等消費税が4月より特別地方消費税に改正された。

*平成12年3月末日で、特消費税廃止。

入湯税より算出